

年齢、障害の垣根を取り払う 富山型デイサービス

特定非営利活動法人デイサービスこのゆびと一まれ 理事長
惣万 佳代子

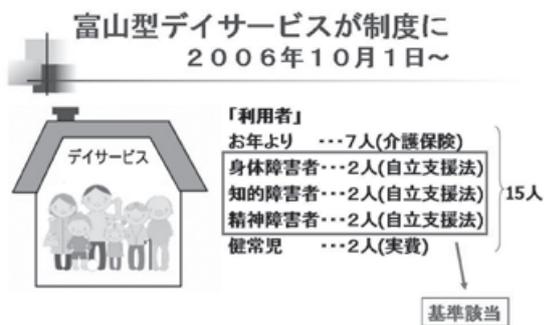


はじめに

NPO法人デイサービスこのゆびと一まれは、平成5年、富山赤十字病院に勤めていた看護師3人が開所させた。対象は、赤ちゃんからお年よりまで、障がいがあっても無くても利用可能にした。「誰もがいつでも、いつまでも、必要なだけ利用できるサービスを」をモットーにスタートした。21年経った今も、活動や理念は変わっていない。

また、多くのボランティアの参加により、「住民参加型福祉」をつくり出し、地域に密着した活動へと進化している。

平成18年10月、富山型デイサービスが制度になり、お年よりは介護保険で、障がい者（児）は自立支援法で利用可能になった。平成25年3月現在、全国で共生デイサービスが1,427事業所に増え、少しずつではあるが広がりを見せている。富山型デイサービスのキーワードは「地域」「小規模」「当事者本位」「共生」である。



1. きっかけ

私は富山赤十字病院に看護師として20年勤めた。退院許可がでたお婆ちゃんが私に「自分の家ながにどうして家に帰れんがけえ。畳の上で死にたいと言うとるがに。これがわしの運命けえ。ナンマイダー」と、手を合わせられた。その言葉で看護師3人が立ち上がった。

た。日中、お婆ちゃんを預かれば、お婆ちゃんはずっと家で暮らすことができる。お嫁さんは働くことができる。看護師として何か力になれないものだろうかと思い、病院を辞めることを決意した。

2. 開所当日

このゆびと一まれは平成5年7月2日に開所させた。7月1日、明日オープンだというのに利用者の申し込みはゼロであった。それなのにテレビや新聞社の取材の申し込みが6社あり、利用する方や家族にインタビューをするとのこと。インタビューを受ける人がいないため、どうしようと思っていたら、午後5時に電話があった。3歳の重い障がい児をもったお母さんからの申し込みであった。「この子が生まれてから一度も美容院に行っただけだ。この子を預けてパーマをかけてきます」との理由だった。私達は最初の利用者は認知症のお年よりであろうと思い込んでいたから、障がいを持つ子どもとは意外であった。

3. 理念

「誰もが、地域で、ともに暮らす」。日本の福祉施設はお年よりだけで50～100人が住んでいる。知的障がい者は300～500人が住んでいる。同じような人達だけで一つのコロニー（村）を作ってはいけないと思っている。その集団は異様であり、お互い相乗効果が少ないと思う。豊かな人間関係の中で人は育つからこそ、喜びも大きい。一人ひとりが輝くのである。

4. 日本の文化である

赤ちゃんからお年よりまで一つ屋根の下で過ごすことは日本の文化である。お年よりは

赤ちゃんの顔を見ただけで笑顔が出て元気になる。「この子達といると気が晴れる」と言う。子どもにとっても、お年よりに可愛がられ、しつけなど教えてもらうことがとても良いのである。あたり前の普通の生活をしているだけである。



5. 利用者Aさん

Aさん（女性）は84歳、認知症、介護度3、独り暮らし。近所の人達が年に数回、「施設に入れて欲しい。困っている」と、このゆびに訴えてきた。独り暮らしなのにご飯を5合も炊いているし、仕出しも10人前をスーパーからとっている。その食べきれないご飯やおかずを朝と夕に玄関に並べるため、のら犬やのら猫がぞろぞろとやって来て困るというのである。

このゆびはAさんのケアマネージャーをしているため、Aさんと近所の人との折り合いをつけなければならない。それが大事な仕事である。

Aさんと近所の人との関係が数年後にどうなったかという、「施設に入れよ」と言っていた人達が早朝Aさんの家の除雪をしてくれるまでになった。

独り暮らしのAさんにとって、ずーっと地域で暮らすことは自由に自分らしく生活ができるからそれは良いことである。それよりも、地域の人達が変わっていくことである。数年前Aさんを施設に入れてしまっていたら、地域の人は変わらなかったであろう。

「俺達が訴えても、Aさんは施設に入らないじゃないか。それをこのゆびと一まれが少し支えている。これからもAさんと一緒に生きていかんなんのか。じゃー、Aさんに何かしてあげることがあるのじゃないか。そうだ、午前8時になったらこのゆびと一まれが毎日迎えに来ている。その前に除雪をしたらAさんもこのゆびも助かるだろう」と話し合い、一晩で雪が40～50cm降った日、道路から玄関までの6m程、道を空けようとなったのである。

6. 利用者Bさん

Bさん（男性）は82歳、慢性呼吸不全、介護度4。常に経鼻酸素をしている。妻と2人暮らしだったが、介護をしていた妻が急死する。Bさんは「これからも家で独りで暮したい」と主張する。それに対し、町内会が反対し、「施設に入って欲しい」と要望した。理由は2つあった。

1つは死後発見のことであった。独り暮らし等の人が死後1週間以上経って発見されたら、「富山市〇〇町の〇〇さんが死後10日経って発見」と新聞に出る。〇〇町と出るから「町内会の恥だ」ということであった。それに対し今後Bさんはこのゆびで夕食を食べてから送ることになる。帰宅は午後7時頃である。もし、午後10時頃に急性増悪し、Bさんが死亡しても、翌日、午前10時頃に迎えに行くので、死後12時間後にこのゆびの職員がBさんが死んでいるのを発見する。「新聞には出ませんね」と言うと、「12時間後なら新聞に載らんちゃね」となった。

2つめは「いつも救急車を呼んでいた。これからも深夜に救急車を呼んだら気になって、眠れない」と言うのだ。それに対し、今後は玄関の鍵をかけないで夜間寝ることにした。なぜなら、深夜に救急車がBさん宅に駆け付けてきた時、鍵がかかっていると鍵を壊してまで隊員が入ってくることを最近知ったからだ。

Bさんに「いつでも救急隊が家に入れるようにしとかんといけんし」と話し、町内会も納得した。その後、町内会は草むしりや除雪をするようになったのだ。「やがて、おら達もBさんみたいに体が弱ってもずーっと家でねばるちゃ」と言っておられた。

7. 今の日本に足りないもの

今の日本に足りないものは、子ども達にお年よりを介護する場面を体験させないということである。お年よりが死んでいく場面を見せないから、自分の命も他人の命も大切にしない子ども達が増えるのだらうと思う。

このゆびで育ったY君は祖父の死体を見ても怖がらなかったし、おじいちゃんの棺桶に入り少し眠った。Y君のお父さんは「1歳の時からこの子はこのゆびで育ち、沢山のお年よりのターミナルを見てきた。この子にとっ

て死は怖くなかったであろう。また、この子なりのおじいちゃんとの別れをしたのでしょう。僕は嬉しかったですよ」。

8. 共生型は事故が多発するか？

平成5年に共生型デイサービスを立ち上げたとき、老人を研究する学者さんが「老人だけのデイサービスでも事故が多いのに、共生型は事故が一層多くなるであろう」と懸念された。実際にはどうであるか。このゆびで(デイサービス18人定員)転倒して骨折されたお年よりは21年間で1人だけである。

では、なぜ事故が少ないのか。小規模であるため職員の目がゆき届く、トイレが近い、床が木か畳であり、セメントのような固い床ではないからであろう。また、お年よりは子どもに見られていると思うと、背筋を伸ばし、シャンとして歩くからである。

9. 共生型は専門性がない？

日本人はとかく「専門家」という言葉が好きである。何が専門家なのかと問いたい。認知症のお年よりも障がい者も子どもの関わり方は70%程度は同じである。あとの30%程度は特性があり、その対応は確かに難しい。

だから富山型には保育士さんや障がい者施設などで働いてきた職員がいる。地域にはいろんな人達が住んでいる。いろんな人達に対

応し、関わるができる人こそ“専門家”だと思っている。町の開業医と似ている。風邪の人からターミナルケアまで、子どもからお年よりまで診察し、対応しているではないか。町の拠点となるデイサービスは町の人達の駆け込み寺でありたい。

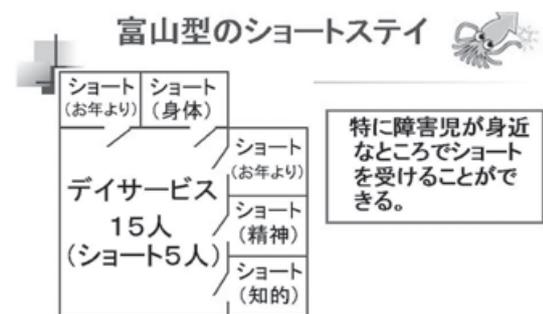
地域は生活の場であり、老人だけの専門、障がい者だけの専門、子どもだけの専門が必要であると強調しなくてもよいのである。

10. とやま地域共生型福祉推進特区

平成23年12月、福祉推進特区をとった。就労継続支援B型で全員が施設外就労である。25年に開所し、「はたらくわ」と名称した。今では富山県下12事業所で21人の障がい者が働いている。このゆびと一まれが事務局となり、各事業所を巡回し、指導・管理をしている。

作業場といっても作業場はなく、働いている場所は介護事業所なのである。オープンするときは大きな土地や作業場や機材の用意をしなくてよいのである。用意するものは電話1本と巡回する車だけである。

富山県のB型就労の工賃(給料)は月に平均1万4,000円ぐらいであるが、はたらくわの工賃(給料)は月に4万~4万5,000円である。月に6~7万円の工賃をもらっている人も多々いる。7万円もらっている人は障がい者年金が月に6万4,000円支給されるので、合わせて13万4,000円が入ってくることになり、自立できる。今までは親亡き後が心配だと言っていたが、親がいても、親にお金で支えてもらわなくても、自立できるのである。また働いている間は生活保護にならなくてよい。将来は、身近なパン屋、ラーメン屋、花屋などでも就労できるようにしたいと思っている。



※今までは30km離れたところに行っていた

共生デイサービス

全国 1427事業所
(2013年3月)
富山県下 111事業所
(2014年10月)

富山型デイサービスの理念

- ・年齢や障害に関係なく、誰もが地域で共に暮らせる町作りを考える
- ・誰も排除しないで包みこむこと
- ・豊かな人間関係の中で人は育ち、喜びも大きい。一人ひとりが輝く。
- 小規模であること。10人~20人程。
- 主な活動は在宅サービスである。
- 活動の拠点は住宅街であり、地域の人達をまきこんで活動する。
- トップが現場で働き続けること。
- 日課がない。行事には力をいれない。
- ・非日常より日常の介護に力を注ぐこと。
- ・当たり前、普通の生活をする。

11. 富山型デイサービス育成講座

平成14年10月より、富山型育成講座をスタートさせた。平成26年で13回目である。

県外からの見学者が多く、それに対応できなくなったため、県に企業家育成講座を要望したことがスタートのきっかけである。最初に担当になったのは新世紀産業機構であった。今は県の厚生企画課が担当し、県社会福祉協議会が請け負っている。平成26年度の受講者は、県内20人、県外35人と県外の方が多くなっている。北は岩手から南は九州までいる。

12. 富山型デイサービス・特別支援学校連携協議会

平成18年6月に発足し、現在も続いている。夏休み中、支援学校のプールを障がい児が使わせてもらっていたが、校長先生が代わり、プールを使えなくなった。それで、当時の県教育長に「これからは学校開放に向かわないといけないのに逆である。考えて欲しい」とFAXした。その結果、連携協議会ができたのである。今では年6回、会合や実技指導を受けている。県の教育長が会合を進行し、校長先生達と本音で熱心にディスカッションをしている。

13. 富山型デイサービス職員研修会

富山型デイサービスで働く職員に対し、富山型の理念の普及や、サービスの質の向上を図るため県が考案し、平成17年4月よりスタートした。講師のほとんどは富山型で働く職員や管理者である。年2回2日間あり、初級編と中級編がある。

おわりに

私達は21年間、行政の縦割と闘ってきた。初めの頃は行政の人と喋っても日本語が通じなかったが、今では良きパートナーと思っている。今までいくつかの特区をとり、規制緩和になっていったのは県と市の力が大きかった。何回も足を運んでもらい国と交渉してもらったからである。行政マンは頭がいいし、政策・企画・文章力が高いが、柔軟性と発想力と行動力が足りない。民間はそれを持っている。行政と民間が協働すると、 $1 + 1 = 2$

ではなく、3にでも5にでもなると確信する。

今まで私を支えてきた2つの言葉がある。

1つは赤十字の理念である「明日の100人を救うより、今日の1人を救え」。NPOは制度があって活動するのではなく、町にニーズがあって活動し、後で制度がついてくる。私達は今日の1人しか救えないが、行政は時間がかかるけれど明日の100人を救うことができるのである。

もう1つは元アメリカ大統領ケネディの言葉である。「国が君達のために何をしてくれるかではなく、君達が国のために何ができるかを考えて欲しい」。私が富山市のため、富山県のため、そして国のために何ができるかを考えたとき、今の私にできることは、このゆびとーまれに来て下さっているお年よりや障がい者の方々に毎日安全に楽しく過ごしてもらい、小さなことの積み重ねをすることである。

日本中の国民一人ひとりが自分に何ができるかを考え、それを行動に移していった場合、この国もきっと住みやすい国になると信じている。



著者略歴

惣万佳代子（そうまん・かよこ）

富山県黒部市生地町生まれ。平成5年3月富山赤十字病院を退職、同年7月民営デイケアハウス「このゆびとーまれ」を開所する。平成10年10月富山ケアネットワーク会長、平成19年8月宅老所・グループホーム全国ネットワーク代表世話人、平成24年7月厚生労働省「共生型福祉施設の設置運営支援事業」委員、平成25年8月厚生労働省「通所介護のあり方に関する調査研究事業」委員。中日社会功労賞受賞（平成13年12月）、日経ウーマン・オブ・ザ・イヤー2003総合2位受賞（平成14年12月）、内閣府・第1回「女性のチャレンジ大賞」受賞（平成16年6月）、「毎日介護賞」受賞（平成16年10月）、内閣府総理大臣表彰（男女共同社会づくり）（平成17年9月）。